学校に行けない子どもたち

指導のねらい

●人類の福祉の向上を図る上で、国際社会における教育や文化の多様性や課題について理解させる。

●発展途上国の教育環境の改善を図ることの重要性を理解させる。

●発展途上国において、教育を受けられない背景には、貧困の問題などがあることに気付かせる。それらの課題を解決し、人類の福祉の増大を図るためには、政府開発援助をはじめとする国際協力が大切であることを、我が国の経済的、技術的な協力などを具体的に取り上げ理解させる。

●「子どもの権利条約」等により、世界中のすべての子どもたちが教育を受ける権利を有しているにもかかわらず、その権利を行使するためには平和な世界と社会資本の充実が必要であることに気付かせる。

学習指導要領との関連

・中学校社会［公民的分野］（4）ア
・中学校社会［地理的分野］（1）イ、ウ

キーワード

基礎教育

「人々が社会の中で生きていくのに必要な知識・技能を獲得するための教育活動」を基礎教育といい、日本では幼稚園や小学校、中学校が大きな役割を占めている。基礎教育の内容はさまざまであり、国や地域など、社会や時代の状況で変わる。また、基礎教育はより高度な教育を受ける基礎ともなる。通常、乳幼児ケアや就学前教育、初等教育、前期中等教育、及び上記内容を学習するために行われるノンフォーマル教育（識字教育、成人教育、宗教教育、地域社会教育など）を含めている。

識字

識字とは「日常生活で用いられる簡単で短い文章を理解して読み書きができること」であり、文字の読み書きと計算ができる能力を指すことが多い。国、あるいはまとまった地域の中で、15歳以上のうち、日常生活の簡単な内容について、読み書きができる人口の割合を識字率という。先進国のほとんどが識字率は100%近くであるのに対して、発展途上国の中には識字率が30%以下という国もあり、また男性に比べて女性の識字率が低いという地域もある。生活をしていく上では読み書きができないことにより大きな不利益を被ることが多い。

資料のポイント

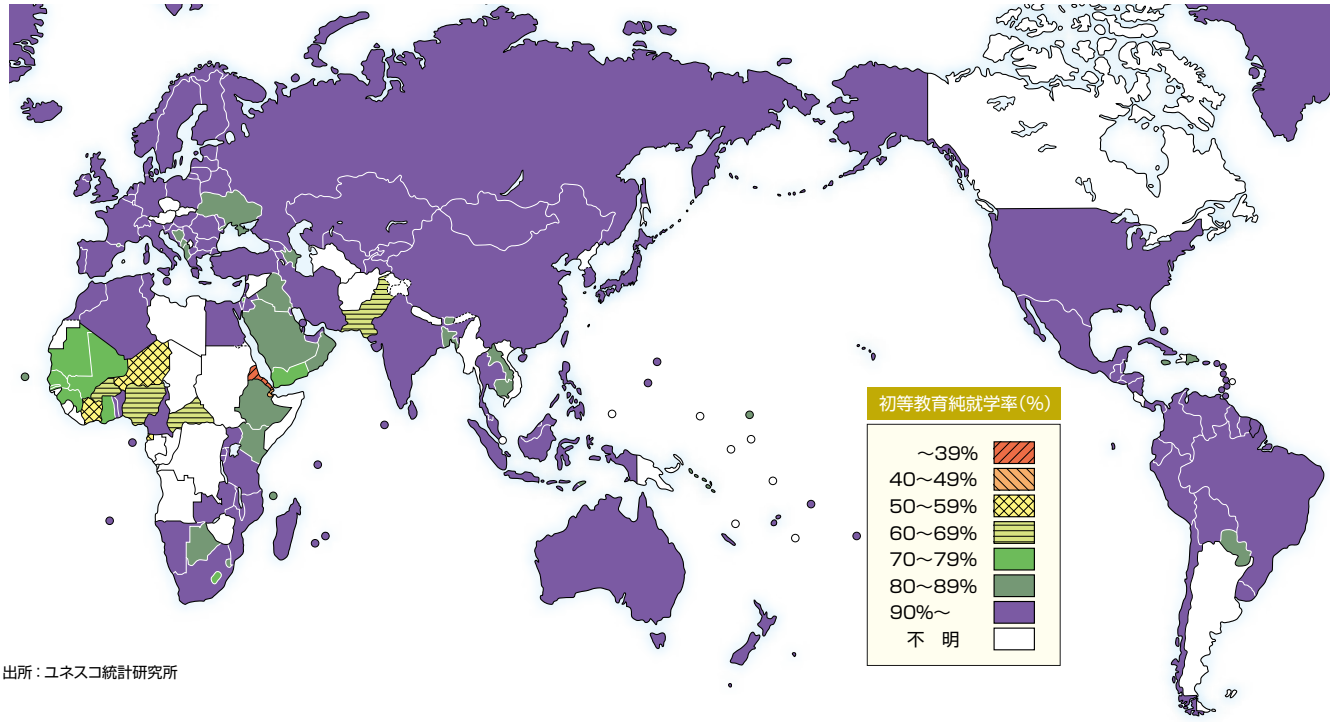
●世界には学校に行けない子どもたちが多数いるという状況を知る。　資料1

●発展途上国における学校に行けない原因を理解させる。　資料2　資料3

●学校に行けないことによって、学校に行けなかった子どもたちにどのような問題が生じ、その問題によって、将来どんな影響を受けるのかを理解し、教育の重要性を認識させる。　資料4　資料5　資料6

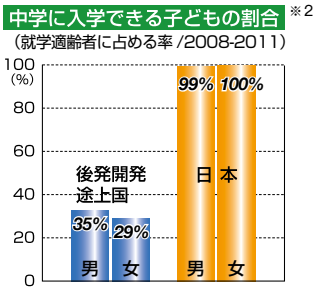
●青年海外協力隊などで派遣された日本の教員が、実際に発展途上国の教育現場でどのようなことを感じ、どのように活動をしたのかを理解させる。　インタビュー

資料1 世界の就学率（初等教育）



出所：ユネスコ統計研究所

※1 UNESCO「EFA Global Monitoring Report（2011）」



※2 UNICEF「世界子供白書2013」

現在、就学年齢に達しても小学校に通っていない子どもは世界中で6,700万人います。その多くは、発展途上国と呼ばれる貧しい国に集中しています。サハラ以南のアフリカの就学率を例にとると、男子81%、女子77%と、5人に1人以上が就学していません。日本の初等教育就学率は、男女とも100%です。また、就学率が低い地域では、小学校に入学しても、卒業まで通い続けることができずにやめてしまう子どもの数も多くなっています。

資料2 学校に行けない8つの理由

理由1 学校が近くにない

日本には学区があって、近くの学校に通います。しかし、貧しい国や地域では、学校の数が少なく、家からは遠すぎて通えないことがあります。

理由2 先生がいない

先生を育てる仕組みがなかったり、先生に給料を払えなかったりする国や地域があります。また、給料や生活環境の問題から、農村地域に先生が行きたがらないということもあります。

理由3 学校に通うためのお金がない

生活をしていくためのお金すら十分に手に入れることもできないため、授業料や教科書代が払えない人が多くいます。

理由4 家計を助けなければならない

家が貧しく、家計を助けるために、子どもでも農業など家の仕事を手伝ったり、外に働きに出なければいけないことがあります。

理由5 弟や妹の世話をしなければならない

両親とも働かなければならないために、子だくさんの家庭では、兄や姉が幼い弟妹の面倒を見なければならないこともあります。

理由6 親が学校に行かせてくれない

子どもを学校に通わせるくらいなら、働かせたほうがましだと考えている親や、女の子に教育は必要ないと考えている親がいます。

理由7 重病にかかった

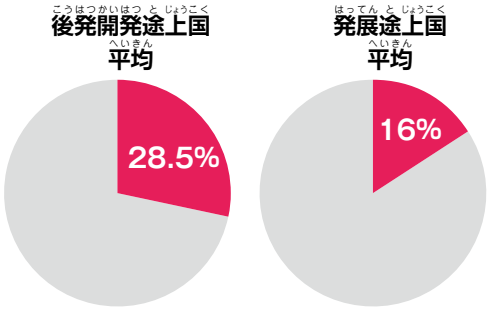
貧しい国や地域では衛生環境が悪いうえに、栄養状態も悪いために、病気にかかりやすく、近くに病院もないために病気が重くなり、治らない子どもがいます。

理由8 戦争に巻き込まれた

戦争などで学校が破壊されたり、難民として避難しなければならなかったり、時には少年兵として駆り出されたりする子どもがいます。

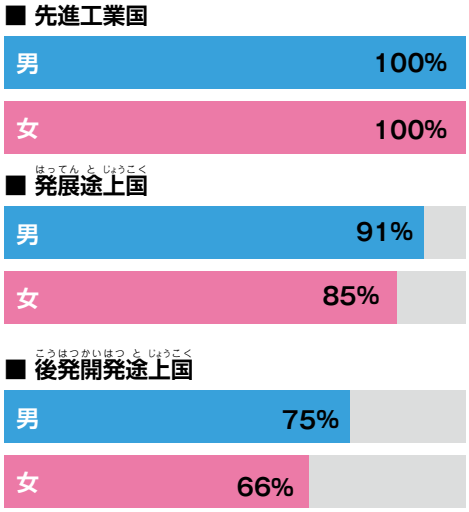
資料3 発展途上国における児童労働（5～14歳）の割合

日本では、労働基準法により、16歳になる年の3月31日から働くことが認められており、児童労働を禁じています。ところが発展途上国では、こうした法律がない、あるいは守られず、生活が貧しいために、子どもが重要な働き手となっていることも珍しくありません。発展途上国でも法律によって児童労働を禁じている国はたくさんありますが、働かなければ生活をしていけないため、多くの子どもが働いているのが現状です。そのため、教育を受ける機会が失われています。この状況は貧しい国ほどひどく、サハラ以南のアフリカでは、5～14歳の男子の34%、女子の32%が児童労働をしています。



出所：UNICEF「世界子供白書2011」より作成

資料4 若者（15～24歳）の識字率



出所：UNICEF「世界子供白書2012」

上の瓶には何が書かれているのか分かりますか？　瓶に書かれている文字はラオ語（ラオスの言葉）で、どちらかが「薬」でどちらかが「毒」です。（正解は右のページの下）このように文字が読めないと、薬と間違って毒（たとえば農薬など）を飲んでしまうこともあります。文字の読み書きができないというだけで、命に関わることがあるのです。世界には、文字の読み書きができない人がいて、その多くが発展途上国に住む人です。

資料5 教育が受けられないことで起こる問題

■ 文字の読み書きができない

読み書きができないということは、本を読むことも、手紙を書くこともできません。それだけではなく、薬の説明や「地雷」「危険」といった注意書きが読めずに、危険な状況に陥ることがあります。

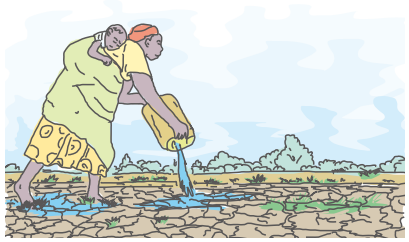
■ 必要な知識を得られない

子どもに必要な予防接種の情報など、生活をしていくための重要な知識を得ることができないので、不利益を被ることになります。

■ 計算ができない

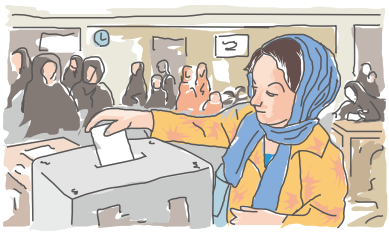
計算ができなければ、仕事の給料や買い物の代金、おつりの金額などが分からずにだまされることもあります。

■ 仕事を選ぶことができない



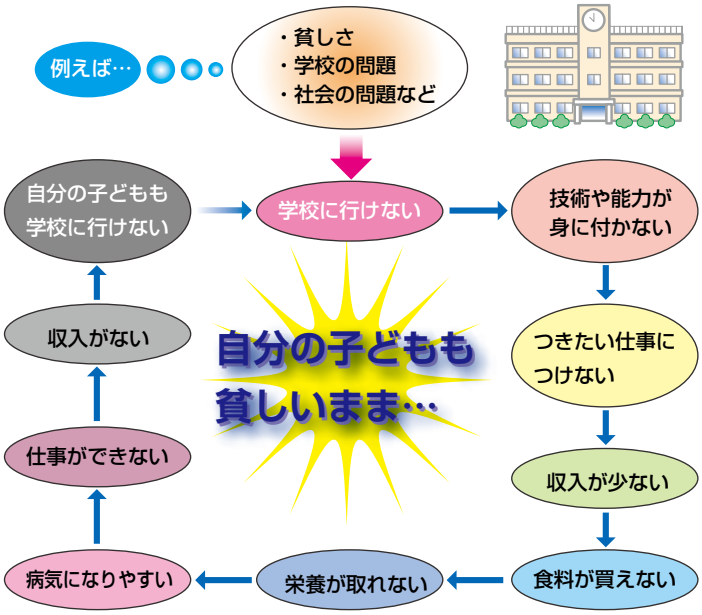
必要な技術や能力を身につけられないので、収入の安定した仕事や希望する仕事に就くことができません。

■ 社会から取り残される



話し合いの資料が読めない、選挙で投票ができないなど、自分の意見を表明することが難しくなります。また、自分の名前が書けなかったり、書類に記入できなかったりすることもあり、公共サービスすら受けられないことがあります。

資料6　教育が受けられないことで起こる“負の連鎖”



学校に行けないと、技術や知識が身につかず、そのため、収入の安定した仕事や希望する仕事につけずに、収入も少なくなります。収入が少ないと、食料などを十分に買うことができず、栄養状態が悪くなります。そのため、病気などになると、なかなか治らないために代わりに子どもが働くことになります。

そして、子どもは労働や金銭の問題があるため、学校に行くことができず、親と同様に貧困状態に陥ります。学校に行けなかった子も、同じように自分の子どもを学校に行かせることができず、その子どももまた貧困に苦しむことになります。このように親から子へ、子から孫へと負の連鎖がおこり、この悪循環から抜け出すことが難しくなります。

インタビュー

発展途上国で活躍する日本の先生

利根川亜希子さん（埼玉県川越市立川越第一中学校教師）

現地の実情に合った教材作り

平成21年6月～23年3月まで、青年海外協力隊の一員として、フィジー共和国に数学の教師として派遣され、13～19歳くらいの子どもが通う中学校・高等学校に赴きました。フィジーの学校の教科書は、オーストラリアから提供されたものをそのまま使っていて、かなりレベルが高く、内容についていけず進級できない子がたくさんいました。そこで授業で実践を重ねながら、教科書をフィジーの実情に合うものにすることを手がけました。それ以外にも、現地の教師のレベルアップも重要な取り組みでした。

さまざまな年齢の生徒がいっしょに授業を受けている。

中学の数学の授業風景。

ステップアップできる土台を作る

フィジーには助け合いの精神があって、困ることがあると親戚や近所の人が助け、飢えることはまずありません。そのため勉強をする子はとても頑張るのですが、それ以外の子は別に学校を出なくてもいいと思っています。どうしてわかってくれないんだろうと思うこともあったのですが、日本のことを振り返って、みんなが本当に助け合うことがどれだけあるんだろうか、フィジーの人々のほうが幸せなんじゃないのか、この子たちに先進国の価値観を押し付けてもしょうがないのでは、とジレンマに陥ることもありました。それでも、フィジーの人々の気持ちに寄り添いながら、小さなステップでもいいから上るための土台を作れたのではないかと自負しています。

写真提供：利根川亜希子

（資料4の正解は、左が「薬」で、右が「毒」です。）